



北九州マイスター
 堀川英樹さん
 (株)ホリカワ

力だけではロープは編めません。 折り合う心や、応用力が必要で、 こちらの力量を試されますね。

自転車から吊り橋まで、
 暮らしの「命綱」として活躍

「ワイヤーロープ」といっても、一般にはちよつと縁遠く思われがち。でも実際には、暮らしのごく身近なところで、私たちも毎日のように接しているのです。たとえば、エ

レベーターを上下させるのもそうだし、自転車のブレーキとタイヤを直結するのも細いながら立派なワイヤーロープ。その他、建設現場や吊り橋、工場、港の貨物の移動など社会のあらゆる場面で、ワイヤーロープ無くしては成り立ちません。

どんなワイヤーロープも、
 端末の「輪っか」が決め手

北九州マイスター制度の第1回認定者となった堀川英樹さんは、まさにこのワイヤーロープとともに人生を歩まれてきた方です。

「私の仕事は、ワイヤーロープの「端末」を作ること。つまり、長いワイヤーの先に輪っかを作ったり、必要な長さに応じてロープ同士を繋いだりします。輪がなければ、いろんなものも吊り下げられないでしょう？」

簡単に「輪を作る」といいますが、これが実は非常に高度な作業。もともとワイヤーロープは、油をしみこませた麻綱を芯に、細いワイヤーを何本もより合わせ、さらにそれらを編んで一本にしたもの。太さも数ミリのものから、直径なんと1mという巨大なものまで千差万別です。

堀川さんは、輪を作った先端を一本ずつほぐし、再び元のロープに差し込みながらより合わせていきます。強靱なワイヤーが相手だけに、冬でも汗びつしよりの力作業。でも、やみ雲に力を入れるのではなく、鋼の弾力や反発をうまく利用しながら、素手と鉄棒の工具で編み込んでいくのです。

「もしおろそかに編んだら、現場でゆるんだり切れたりして、恐ろしい事故にもなりかねません。一本のワイヤーロープに人の命がかかっているんです」。

かつての仲間の悲運が
 ワイヤーロープへの情熱に

思い返せばまだ働き始めた若い頃、ワイヤーロープが目の前で切れて先輩が命を落とすという悲痛な



体験をされたとか。そんな事故を絶対に無くしようと、40年近く研鑽を積み、この業界自体の技術指導にも当たってきました。その甲斐あって、ロープの事故も激減。今では全国で規格も統一され、堀川さんも技術者の国家検定委員を務めるほどになりました。

profile



堀川英樹さん
 昭和5年満州生まれ。高校卒業後、とび職として全国各地で修業。その間にワイヤーロープの技を磨く。42歳で

独立し、現在の「(株)ホリカワ」を創業。全国でも屈指のワイヤーロープ技術者として経験を重ね、全国ロープ加工組合連合会副理事長や国家検定委員などを歴任する。2001年「北九州マイスター」に認定。

北九州マイスター制度とは

モノづくりのまち・北九州市ならではの独自の制度。これまで市の産業発展に貢献してきた優れた技能者が持つ技術・技能を地域の「宝」として継承していくことが狙い。溶接、機械加工、半導体仕上げなど工業製造業の分野が中心になっているのも特色で、現在20人が認定を受けている。認定者は、次世代のマイスターを育てる「匠塾」の講師としても活躍している。